

崇城大芸術学部 of 学生らの制作展。中央左寄りの立体は「浮遊する岩盤」を表現した川口勇貴さんの作品＝熊本市中央区



若い感性 集大成並ぶ

崇城大芸術学部の卒業展・修了展

崇城大芸術学部の学生
の卒業展と大学院修
了展が20日、熊本市中

央区の県立美術館分館で始まった。日本画や洋画、彫刻、視覚芸術、デザインなどを専攻する48人が出品している。25日まで。

テーマはラテン語の「Carpe diem」で、今この瞬間を楽しもうという意味。学生時代の集大成とし、見る人にも楽しんでもらおうと企画した。

4年の川口勇貴さんは断熱材などで立体の「浮遊する岩盤」を作り、今の自分自身を表現したという。岩盤は高さ1メートル、幅1メートル2センチほど。風雨にさらされた雰囲気は外界の刺激、岩盤に配置した見張り台や建物は安定した生活を表している。

大学院2年の井添将仁さんは、鳥取砂丘を題材に日本画で「異国のような場所」を表現。青と白のストライプのシャツを着た黒色の人物たちが、丘の上でバレエのポーズをとる。「大学を出ても面白い絵を描きたい」と話した。

24、25日にギャラリートークがある。

(中原功一朗)